

今はあとかたもなく、絶えることのない沼の御前の清水とともに、六角の地名と六角石を残すだけとなった。ちなみに一角は後牧本の地安養寺に移り住み、その子孫が、今もおられるそうである。

(話者 桑名四郎)

死人窪

《滝》

滝屋敷の入口、東の山の窪を死人窪と呼んでいる。昔は度々凶作などが読んで、食物が不足していたので、六十歳になると、親を山に捨てたといわれる。死人窪に小屋を造り、それに入って、「まつむし鐘」をチャカンチャカンとならしながら死ぬのを待っていたという。

孝行な息子があつて、親を捨てることができずに、食物を運んでくれた、その親はいつまでも生きていた。ある時、村人は、殿様より難題をいつけられた。それは『灰で繩をもぢつて来い』という命令だった。村中だれも分からず、困ってしまった。そのとき、その息子はこっそり小屋に行つて、親に聞くと、『それは藁で繩をもぢつて、それを燃やすとできんだ』と教えられた。早速、灰の繩を造つて、殿様に持つて行つたところ、よくできたとほめられた。

年寄は仕事が出来なくて役に立たないようだが、いろいろな経験から物を知っているので大事にしないでならないと、それからは六十歳になつても、親を捨てなかつたという。

また、一説には、死人窪は、村に来て無縁の者が死んだ時捨てたともいう。

(話者 江連 栄)